Jan Breman,

The Making and Unmaking of an Industrial Working Class: Sliding Down the Labour Hierarchy in Ahmedabad, India.

Amsterdam: Amsterdam University Press, 2004, x＋315pp.

木曽順子（きそじゅんこ）

I

タイトルにあるように，本書のテーマはインドのアフマダーバードにおける労働者階級の創造と破壊である。著者のJ・ブレマンはオランダのアムステルダム大学の名誉教授で，序章によると，氏はかつて1976年にエラスムス大学で比較社会学の教授に任命された折り，その就任演説でインフォーマル・セクター（以下IS）について論じたという。まさに評者が最初に目にした氏の論文が，インドの主要政治経済雑誌*Economic and Political Weekly*に掲載されたその英語翻訳論文“A Dualistic Labour System？”であった。これは，ISに関する議論が開発経済学の分野で注目され始めたばかりの極めて早い時期に発表されたフォーマル，インフォーマル二分論に関する批判的論文である。ブレマン氏は1960年代にはすでにインド西部グジャラート州の村落で社会経済調査を始めており，その後長年にわたり同州でのフィールドワークに基づき，労働者や農村非農業経済などに関する数多くの研究成果を発表してきた。本書はその研究のフィールドを英領植民地期から繊維産業の街として発展してきた同州最大の都市アフマダーバードに移し，フォーマル・セクター（以下FS）からISへと転落していく労働者の実態とその歴史的背景を分析した貴重な研究の成果である。

さて，インドの経済自由化が1980年代に徐々に始まり，91年以降の経済改革でさらに自由化・規制緩和が進められてきたことは改めて言うまでもないだろう。労働市場のフレキシブル化も重要な課題となり，それは事実上様々な形で進んできた。しかしその影響をめぐる議論はいまだ収束していない。単純化すると，一方では労働生産性の上昇，実質賃金の上昇，中間層の急増や貧困緩和などが指摘され，他方では貧困から脱却できない労働者層の堆積が注目されてきた。本書は後者の立場から，第Ⅰ部では，アフマダーバードの繊維工場労働者が，ガンディー主義労組アフマダーバード繊維労働者組合（以下TLA）の成長とともにひとつの階級として創造されてきたこと，それにもかかわらず，やがて合理化と経済自由化の波が押し寄せるなかで大量失職が相次いで起こるまでを扱っている。そして第Ⅱ部では，失職により旧工場労働者が陥った厳しい状況と，さらに2002年グジャラート宗教暴動との関係までが考察されている。序章にあるように，本書では第Ⅰ部の方が後で執筆された。つまり失職によって労働者たちの何がなぜ破壊されたのかを明確にするために，何がどう創造されてきたのかが析出される必要があったというのである。本書の章別構成は次のとおりである。

序　章
第Ⅰ部　工業労働者階級の創造
　第１章　工業労働力の誕生
　第２章　団体行動のフォーマル化
　第３章　TLAのヘゲモニー
　第４章　「正しい闘い」再考
第Ⅱ部　工業労働者階級の破壊
　第５章　フォーマル・セクターからの労働者排除
　第６章　劇的な悪化
　第７章　包摂から排除へ
　第８章　インフォーマル化された労働制度
　第９章　搾取・周縁化の形態たるインフォーマル性

II

以下ではまず章を追って本書の内容を要約しておこう。

第１章では，アフマダーバードにおける工場制綿工業の成立過程，初期工場労働者の劣悪な労働・生活環境，団体行動の萌芽的な発生までが論じられている。同地に最初の綿工場が設立されたのは1881年であった。労働力は当初は在来の手織り職人から調達され，その後不足するにつれてジョッバー（現場監督兼仲介者）による調達が一般化した。工場での職務はたいていカーストや宗教によって決定された。労働環境，住環境ともに極めて苛酷でアフマダーバードの罹病率・死亡率は他都市よりはるかに高かったという。本章では1891年のアフマダーバード工場所有者協会（以下AMA）設立の経緯や，同年の改正工場法による女性・児童の労働制限と女性労働者の抵抗運動，また20世紀初頭，民族独立運動の高揚とともに社会改革者が始めた工場労働者・家族を対象とした奉仕活動についても紹介されている。

第２章は，第１次世界大戦から1930年代の経済不況期までのアフマダーバードにおける労働運動を扱っている。労働者による組織的・制度的な団体行動の基盤が整えられるのがこの時期で，きっかけは歴史に残る1918年の労使間対立であった。この争議の仲裁が，南アフリカから戻り当時アフマダーバードに定着していたガンディーに要請された。ガンディーは労働者に「正しい闘い」を訴え，この争議を経て1920年に結成されたのがガンディーを顧問とする労組TLAであった。ガンディー主義に基づくTLAは，労働者の社会的責任や雇用者に対する義務を強調し，労使の対立ではなく協調を目指して仲裁制を交渉の柱にした。生活領域にまで及ぶ多彩な活動によってTLAは労働者の信用を高めた。しかし1930年代にはその経営者寄りの妥協的態度により信任を失い，経営者側との間の産業平和も一旦瓦解する。

続いて第３章では，TLAの全盛期から1960年代末の凋落前夜までの過程がたどられている。叙述の中心は1935年争議で壊れたAMA-TLA軸の復元とTLAモデルが全国モデルにまで発展していく過程である。1937年争議でAMAはTLAを唯一の交渉窓口と宣言し，この結果TLAは再び組合員数を急速に増やしていった。しかも西インドの州政権を会議派が握ると州の労働政策にもその影響を及ぼすようになる。そして1947年の独立直前に設立されたインド国民労働組合会議（INTUC）は，まさにTLA同様に労使の調和をその運動理念とした。本章のもうひとつの核はTLAの「負」の側面の指摘であろう。これは主に，1936年に全インド農民組合（AIKS）を結成したＩ・ヤグニークによるTLA批判を通して示されている。つまり，権威主義的で家父長的な性格，労働者の闘争の抑制，労働者の真の望みからの乖離などである。しかし，やがて1960年代初頭の合理化キャンペーン，TLAの妥協，結果としての労働強化は，TLAに対する決定的な不信感を労働者のなかに生む。

第４章では，まずガンディー主義に基づくTLAの「正しい闘い」の限界が論じられた。つまり，寡頭制的なトップダウン方式で，外部指導者が労働者を指導し，いかなるレベルでも労働者が執行部に入るチャンスはないというクライアンティズム，こうした特徴をもつ組合の運営構造を踏まえて，労使協調を大前提とした「正しい闘い」が再考された。そしてブレマンが強調したのは，労働貴族という表現には一定の留保が必要だとしながらも，1970年代末の工場閉鎖前まで，工場労働者は都市IS労働者とは大きく異なる権益や尊厳を手にしていたという点であった。また職務だけでなく居住地もカースト，宗教，出身地等の原初的帰属意識（primordial loyalties）によって分かれる傾向があったと指摘する。原初的帰属意識と労働者階級としての連帯は，いずれも工業労働過程への参入によって形成された労働者の組織化原理だが，TLAによる前者重視は，「異なる社会集団間の連帯感を蝕み」（p.134），やがて工場からのムスリム排除をTLAが傍観する結果につながったという。

第５章からが本書第Ⅱ部である。1970年代末に非正規雇用の労働者を含めて16万人を数えたアフマ

ダーバードの繊維工場労働者は，20世紀末にはおよそ１万5000人まで激減した。本章では，この激減をもたらした工場閉鎖の原因と，失職労働者に関するブレマンの調査の方法や調査対象者のプロフィールが示されている。第Ⅱ部を貫いているテーマは，失職労働者は果たして再就職し，相応の収入と生活を維持し得てきたのかという点であった。ブレマンは，繊維工場労働者の大量失職の時期を，1970年代末から80年代はじめと，85年の繊維産業政策以降の２つの時期に大きく分ける。そして大量失職を生み出した原因として，繊維産業の構造変化，経済自由化政策に加えて，無力なTLAを断罪する。なお調査は1980～98年の間に閉鎖された33の旧繊維工場の労働者600人を対象に98年３～７月に実施された。失職当時30～45歳の男性が中心で，下位カーストやムスリムが多く，ほとんどが失職のその日までTLAメンバーであったと推定された。

第６章では，まず労働者600人への失職のインパクトが整理されている。再就職した者が多いが，大多数が日雇いの臨時仕事に就き，求められる熟練レベルは総じて低い。労働時間は長時間かつ不安定で労働日数も定まっていなかった。所得低下も激しい。また職探しで助けになったのが原初的帰属意識のネットワークであった。ブレマンはここでも，解雇が組合員資格の喪失を意味した点でTLAは労働者の信頼を裏切ったと述べる。「ガンディー主義の組合指導部は，労働者がFSから排除された時に，彼らの代表として断固たる姿勢をとる代わりに彼らを見殺しにした」（p.189）のである。また，TLAや政府による再訓練・再雇用計画の不成功とその原因にも触れている。

第７章では，失職労働者とその家族の厳しい貧困化の実態が60世帯の調査等によって示されている。スラム化した居住環境，食事・医療水準の低下，子弟の教育の中断，家族関係の悪化などである。また，労働者階級の前衛としての自尊心も失われ周縁化された。そして強調されたのは，こうした下降移動にもかかわらず抗議の団体行動が起こる余地はなく，逆に工場労働者としての連帯が消滅して原初的帰属意識の重要性が増した点である。つまり，組合から見捨てられた旧工場の労働者は，分断されたまま生存のため希少な働き口を奪い合ってきた。そしてこれが，政治のコミュナル化と相俟って，1985年のアフマダーバード宗教暴動にみられたように労働者が宗教暴動に取り込まれるひとつの条件になったという。「20世紀末…（中略）…綿工業の衰退と大規模工業生産を支えていた労働力の大量排除は，仕事よりもはるかに大きなものの喪失」（p.231），つまり分断を超克し得る労働者間の絆の喪失をもたらした，とブレマンは述べる。

第８章では，アフマダーバードで起こってきたIS拡大の意味が再検討された。根底には肯定論に対する疑義がある。つまり近年ILOや世界銀行などの国際機関は，かつて開発過程の構造的矛盾の現れと見なしていたISに対する見方を変え，その拡大を問題ではなくむしろ貧困解決の方途と見なす傾向があった。他方で雇用の安定を保障された労働貴族の存在は不公平の象徴であるばかりか労働市場の歪みをもたらし，経済発展の桎梏になってきたと考えている。したがって経済自由化による二重労働市場の解消，ひいては経済のフォーマル化ではなくインフォーマル化による解消が肯定されるようになったと説明する。これが一因となってアフマダーバードでも急速に労働市場のフレキシブル化と雇用のインフォーマル化が進み，1970年代初頭に同都市労働者の半分と推定されていたIS労働者が20世紀末には４分の３ないし５分の４を占めるまでに増えたという。では，インフォーマル化は実際に貧困解決をもたらしてきたのか，その再検討が同章の具体的な課題である。ブレマンは経済改革以降の状況の好転を指摘する諸研究の成果を紹介したうえで，それに対する反証を試みている。

最後の第９章では，アフマダーバード労働者のインフォーマル性の実態として，生活水準の実質的悪化，不完全就業，極端に低い収入，不安定な労働時間，家族の労働力化等の点を整理し，こうした「現象を雇用増の現れと解釈することは，この経済戦略の根底に存在する悲惨さの明確な否定を意味している」（p.263）と糾弾する。さらに同都市の貧困人口比率が縮小しているという説に対し，マクロ・デー

タでは正確な実態把握ができないこと，また生活の質的低下，挫折感・無力感など労働者の精神面での変化にも注目すべきだと述べている。開発の新たな方向としてケイパビリティ（潜在能力）概念が注目され，人間開発の重要性が認められるようになってきたが，その理念と裏腹にグジャラート州で現実に起こってきたのは実際の政策の乖離であり，結果としての貧富の差の拡大であったと述べる。最後に，ISを含む広範な基盤をもつ新たな連帯の結成，政府による規制や市場機能の制限，広範な社会福祉計画の策定・実行に，労働者のより良い未来への希望を託している。

Ⅲ

以上に示したように，創造されやがて破壊されたのは，労働者の権利，尊厳，そして連帯であった。アフマダーバードという歴史的工業都市に視点を据え，現代のインドが直面している問題を長いタイムスパンでダイナミックに描出した本書は極めて高く評価できる。さらにアフマダーバードに独特のガンディー主義組合TLAが第１次非暴力抵抗運動の時期に結成され，経済自由化とともに崩壊していく様が丹念に描かれている点も類書にない特徴で興味深く読んだ。また経済改革以降のインドについては急速な経済成長に伴う華やかな変化が強調され，逆に問題点の指摘自体が経済改革への反動と見なされがちなせいもあってか，失職労働者に関する研究を含めて問題点を析出する実証的研究は十分ではない。その意味でも第Ⅱ部の研究成果は極めて貴重だろう。ただ，せっかくのフィールド調査の具体的な数量データが図表としてあまり掲載されておらず，資料的な価値が減じられたのは惜しまれる。また全体的に叙述の重複がみられることも気になった。最後に内容的なコメントを多少加えてこの書評の結びとしたい。

ブレマンは本書において，留保条件付きでインフォーマルとフォーマルの二分論の有効性を認めている。その再評価は第１章の工業草創期に関する部分で最初に述べられる。本書に限らずブレマンはIS概念を，都市・農村両方の未組織部門全体を指すなど非常に幅広い概念と考えている。しかし20世紀初頭の工業化初期の状況にも該当するかのような叙述は混乱を招くのではないだろうか。インドでは工業化の早い段階から工場労働者が組織化や法的保護を獲得していったのは事実だが，時期を問わず工場労働者以外をISと称することは評者には違和感がある。なぜなら，ISは経済開発が進められてきた途上国で，労働力供給増にFS需要が追いつかないため，FSへの参入を望みつつもその外部に留まり，とくに都市に堆積してきた労働者群に着目して，1970年代初頭から議論が高まった概念だからである。

次に，工場閉鎖や解雇による大量失職と雇用のインフォーマル化はグジャラートでは経済改革以降ではなく，1970年代末からの現象であったとの指摘についてである。アフマダーバードの場合，元来綿工業の中心都市であっただけに，綿工業の衰退や繊維産業政策の影響を受けて雇用への打撃が早くから現れ，それが際だって大きく深刻だったのは確かである。加えて大規模工場が集中し労働者の組織化が進んでいたこともあり，影響は見え易かった。しかし，雇用のインフォーマル化もしくはIS雇用の拡大がじわじわと進み，経済改革以降さらに過激な形で進展したというのは，実は程度の差はあれより広範な地域，産業に該当しよう。インドのFS雇用の増加率は，大まかに言っても1970年代に比べて80年代に下がり，90年代にさらに低下してきた。本書の事例を労働市場全体の趨勢のなかに位置づける試みがもっとあっても良かっただろう。

本書の重要な論点のひとつは，経済自由化と雇用のインフォーマル化により，雇用が増えしかも貧困緩和が進んだのかという点であった。これにブレマンは強く反論している。ただし本書では，マクロな計量分析への批判が根底にあるためか統計的な数値が全体的に十分に活用されておらず，IS雇用の拡大についてもそうである。しかしこれは重要な論点だけに数値の根拠を示しておく必要があろう。他方，FS雇用がどのように変化してきたのかについても曖昧である。アフマダーバードでも大きな産業構造転換や産業立地の変化があったと指摘しているが，

この関連でFS雇用の変化が分析されていれば，地域研究の利点が生き，インフォーマル化のメカニズムはより明確になっただろう。さらにインフォーマル雇用にはまったく希望がないのかという点にも注意が必要である。FS雇用が限られている限り，ISの発展可能性を追究することは不可欠である。これはISに注目してきた評者にとっても今後の課題であり，自戒を込めて指摘しておきたい。

最後に，ブレマンのもうひとつの重要な主張，すなわちIS労働者が拡大し，かつて存在した連帯の崩壊と原初的帰属意識の強化が2002年の流血のグジャラート暴動の一因になったという仮説についてである。この可能性は否定しないし評者にはその力もない。むしろ経済インフォーマル化の政治的影響の一面を示す卓見かもしれない。しかし，ブレマンのここでの論証は十分ではない。「たまたま同僚や隣人であった人々との間に共通点は何もないというプロパガンダの犠牲になるのは簡単であった」（p.6）とブレマンは述べ，また旧工業地帯での凄まじい蛮行を傍証とした。しかし連帯の崩壊を一因として強調するのであれば，旧工場労働者およびその分断と暴動との関係をもう少し明快に説明する必要があろう。ことの深刻さ，暴力の絶望的な酷さゆえだけではない。経済改革のあり方に関わるという意味でもこれが重要でかつ慎重さを要する仮説だからである。

（フェリス女学院大学国際交流学部教授）